

古代アンデスの染織文化

—ナスカ・チャンカイ文化期の織りと染め— (2)

Textile Culture of Ancient Andes

—Weaves and Dyes in Nazca and Chancay Cultures— (2)

齊藤昌子

Masako SAITO

1. はじめに

昨年の本紀要に、平成 9～24 年度本学被服管理研究室が 4 年次の卒業演習「アンデスの染織文化」として行ってきた成果の一部である平組織、綴、縫取り、二重織、チャンカイレース、振、単一組織の 69 点についてまとめた¹⁾。本論文はその続きとして、紋織と複合組織についてまとめたものである。

2. 資料

東京大学総合研究博物館が所蔵する古代アンデス染織品 35 点 (表 1) を資料とした。表 1 はこれらの資料を織組織別に分類して示したものである。制作時期は、チムー文化期 (900~1470 年頃) が 5 点、チャンカイ文化期 (紀元 1100~1470 年頃) が 28 点、不明が 2 点で、チャンカイ文化期のものがほとんどを占めている。

表 1 に示す織物分類の内、経浮文組織の 10 点については結果を既報²⁾ で報告しているので、本論文では省略した。

3. 調査・分析の方法

3-1. 織組織の分析と再現

織物の織組織を分析し、組織図を作成した。組織の確認のために再現織物を作成した。織物の制作は、古代アンデス人が使用した腰帯機と同じ方法で行った。

3-2. 繊維素材の分析

経糸、緯糸の素材を顕微鏡で観察し、判定した。

4. 調査・分析結果

4-1. 経紋織 (経糸で紋様を形成していく織物)

4-1-1 二重経紋織

経糸で文様が形成されるもので、経糸が 2 色 1 組で使われ、表裏には逆の文様が出る昼夜文様となる。チャンカイ文化期の紋織にはこの組織が多い。浮糸織のようなごく単純な文様のものから、複雑なものまで多様なものが存在する。表と裏は同じ単位で動くため表と裏の区別は分かりにくい。

平織布の一部に紋織を入れたもの (cha 80, 93, 125, 127, 131) と、紋織部分を先に織り、かがりつけたもの (cha 90, 130, 131) があった。平織布に紋織を入れた cha 80 を写真 1 に、紋

表 1. 東京大学総合研究博物館所蔵「古代アンデス織物」資料 (織組織による分類)

織組織	資料番号	織物名称 ¹⁾	地域 ²⁾	文化期 ³⁾	寸法 (cm)	素材 ⁴⁾		その他	
						経糸	緯糸		
経 織	二重	cha 80	獣面文様経紋織裂	中央海岸	チャンカイ	17.5 x 17	木綿	木綿	
		cha 90	抽象文様経紋織裂	ペルー	チュム(?)	10 x 24	木綿	木綿	cha 133 と同裂
		cha 93	平織・経紋織裂	中央海岸	チャンカイ	9 x 14.5	木綿	木綿	cha 127 と同裂と思われる
		cha 125	経緯経紋織裂	中央海岸	チャンカイ	11.5 x 23	木綿	木綿	
		cha 127	平織・経紋織裂	中央海岸	チャンカイ	15 x 22	木綿	木綿	cha 93 の下部と思われる
		cha 130	鳥文様経紋織裂	中央海岸	チャンカイ	16 x 6.5	木綿	木綿	
		cha 131	経緯経紋織裂	中央海岸	チャンカイ	14.5 x 10	木綿	木綿	
		cha 133	抽象文様経紋織裂	北海岸(?)	チュム(?)	21 x 24	木綿	木綿	cha 90 と同裂
		cha 139	鳥・獣面文様経紋織緯裂	中央海岸	チャンカイ	18 x 12	木綿	木綿	紋糸は獣毛
	三重	cha 27	鳥文様経紋織紐	中央海岸	チャンカイ				
		cha 110	三重経紋織裂	中央海岸	チャンカイ	17.5 x 4	木綿	木綿	紋糸は獣毛
		cha 111	三重経両面紋織緯裂	ペルー(?)	不明	15 x 1	獣毛	獣毛	
		cha 112	鳥抽象文様三重経紋織紐裂	ペルー(?)	不明	13.5 x 2.5	獣毛	木綿	
	経浮文 組織	cha 21, 82, 83, 103, 121, 128, 132, 134, 142, 145							
頸複様 組織	cha 33	階段文様経紋織裂	中央海岸	チャンカイ	12 x 15.5	木綿	木綿		
	cha 85	階段文様経紋織裂	中央海岸	チャンカイ	11x 22	木綿	木綿		
経複様平 組織 (経緯)	cha 144	鳥文様経紋織裂	中央海岸	チャンカイ	15 x 11	木綿	木綿		
	cha 147	人面(?)文様経紋織裂	北海岸(?)	チュム(?)	13.5 x 16	獣毛	獣毛		
緯 織	二重	cha 89	平織・緯紋織裂	中央海岸	チャンカイ	17 x 8	木綿	木綿	cha 143 と同裂
		cha 113	鳥・波文様緯紋織裂	中央海岸	チャンカイ	2.5 x 17.5	木綿	獣毛	
		cha 143	経緯平織・緯紋織裂	中央海岸	チャンカイ	15 x 22	木綿	木綿	cha 89 と同裂と思われる
	三重	cha 109	鳥文様三重緯紋織裂	中央海岸	チャンカイ	5.5 x 22.5	木綿	木綿	
		cha 124	抽象文様三重緯紋織裂	中央海岸	チャンカイ	4.5 x 12	木綿	獣毛	
		IZ 16	階段鈎文様三重緯紋織裂	中央海岸	チャンカイ	13.5 x 12	木綿	獣毛と木綿	紋は獣毛と木綿
複合	縫取両面組 織緯	cha 78	房付き獣面文様縮緬縫取・ 波文様緯紋織裂	北海岸(?)	チュム(?)	25 x 13.5	木綿 S 単糸	青 Z 単糸 黄 S 双糸 赤 S 双糸	縫取 + 二重緯紋織
		cha 146	房付き獣面文様縮緬縫取・ 波文様緯紋織裂	北海岸	チュム	27 x 14	木綿 S 単糸	青 Z 単糸 黄 S 双糸 赤 S 双糸	縫取 + 二重緯紋織 cha 78 と同裂ではない (青 Z 単糸の色は cha78 と同じ)

織部分をかがりつけた cha130 を写真 2 に示す。

Cha 90 と 133 は同一の裂と推測される。布の経糸方向が不確かであるが、cha 133 の矢印方向を経糸と考え、横方向の文様は初めから平織布に織り込まれた文様で、縦方向の文様部分は別に織った細い経紋織布をその上にかがりつけたもので、cha 90 (写真 3-2) は cha133 (写真 3-1) の真ん中部分に相当するものと推

察した。

同様に、cha93 と 127 も同裂と判断した。使用されている糸は、cha 139 を除き、全て(経糸、緯糸ともに) S 撚り双糸の木綿で、cha 139 の経糸のこげ茶と黄色のみが獣毛であった。

4-1-2 三重経紋織

経糸に 3 色の糸を 1 組として用い、緯糸の上

に経糸の浮きを作って文様を織り出したもの³⁾。経糸の1本が表面で文様を作り、他の糸は裏に沈む。表に出ない部分は芯となり、必要に応じて表に出る。

cha 27 (写真4, 図1) は、赤、黒、黄の3色の経糸が、緯糸に細い白糸が使われ、経糸の3色はほぼ同じ太さのS撚り双糸獣毛で、緯糸はS撚り単糸木綿であった。経糸は3色1組の、16組の糸束が経糸を構成し、各組の1本が緯糸に対して表側に出ている時、他の2本は緯糸の裏側を通して芯の役割を果たしている。文様の繰り返し単位は4.5~5cmであった。

Cha110 (写真5, 図2) は、経糸にS撚りの双糸獣毛(赤)、双糸木綿(青)、単糸木綿(白)の3色と、両脇の縁にS撚りの双糸獣毛(黄)が使われ、緯糸にはZ撚りの単糸木綿(薄茶)が使われていた。経糸は赤、青、白の3色が1組とされ、36組の経糸で織られていた。赤、青、白の経糸の内の1本が緯糸に対して表側に出ている時、他の2本は裏側にあり、両脇の黄糸部分は平織で織られていた。緯糸は4本1組で、4本引き揃えて織られていた。この布は他の目の詰まった布とは異なりかなり緩く織られていた。

4-1-3 類複様組織

経糸3色を1組とし、その内の2本が文様を作り、残りの1本が地糸の役目をし、それと交差する緯糸が文様を押さえている。その押さえの緯糸は、1本交互に上下に打ち込まれるが、平織にはならない。表裏同じ文様が一段ずつずれて現われる。

cha 33 (写真6, 図3) は、経糸がS撚り双糸木綿(茶、紺)で、緯糸はZ撚り双糸であった。

Cha 85 (写真7) は、地糸と交差する緯糸が2本交互に打ち込まれ、表裏は2段ずれて文様が現れていた。経糸の密度が高いので文様のはっきり出ている。

4-1-4 経複様平組織(経錦)

2本以上の経糸を一組とし、文様を構成する陰緯と、この2本を固定させるための平織を構成する母経が交互に織り込まれている織物である。色彩を複雑に見せるために経糸をブロック毎に配色を変えている。

cha 144 (写真8) は、経糸にS撚り双糸木綿(茶、灰色、薄茶)の3色が使われ、緯糸に同じくS撚り双糸木綿(茶)が使われている。2枚の布が縫い合わされて、1枚の布になっていた。

cha 147 (写真9) は、経糸にS撚り双糸獣毛(緑、赤茶、黄)が使われ、緯糸には同じくS撚り双糸獣毛(茶)が使われていた。

織組織は、ともに経糸を2本で1組として、平組織を構成し、緯糸(母緯)、文様、地を構成する緯糸(陰緯)が交互に織り込まれ、複経で両面に二重の組織を構成していた(図4)。

鈴木は著書⁴⁾の中で、アンデスの経錦について詳しく記述している。その内容は、チャンカイ文化期の外套衣が中国の漢~隋時代に製織されていた経錦の組織に類似するものであること、佐々木信三郎氏がこの様な組織を「経複様平組織」と仮称し、現在一般に通称されるようになったこと、さらに、アンデスの経錦に類するものの中には、経糸が両面表に現れるものも見られ、その名称を付け難いこと、複雑化されたものは、他の紋織でも類似の文様を充分表すことができることから、アンデスでは織られることが少なく、出土遺物も少ないこと、また、チャンカイ文化期とインカ文化期の経錦では、織組織が異なることなどである。

これらのことを参考にすると、この2点の経錦裂は、チャンカイ文化期の貴重な経錦の資料であると思われる。

4-2. 緯紋織(緯糸で文様を形成していく織物)

4-2-1 二重緯紋織

平織布に二重の緯紋織が施されたもの。

cha 143 (写真10) は単純な両面紋織で、平織



写真 1-1. cha 80 「獣面
文様経紋織裂」(東京大学
総合研究博物館所蔵品)



写真 1-2. cha 80 の拡大写真
(東京大学総合研究博物館所蔵品)



写真 3-1. cha 133 「抽象文様紋
織裂」(東京大学総合研究博物館所
蔵品)



写真 2-1. cha 130
「鳥文様経紋織裂」
(東京大学総合研究
博物館所蔵品)



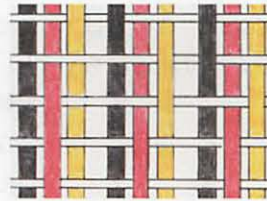
写真 2-2. cha 130 の拡大写真
(東京大学総合研究博物館所蔵品)



写真 3-2. cha 90 「抽象文様紋織
裂」(東京大学総合研究博物館
所蔵品)



(左)
写真 4-1. cha 27
「鳥文様経紋織紐」
(東京大学総合研究
博物館所蔵品)



(右)
同上(拡大写真)



写真 4-3. cha 27 の
再現織物

図 1. cha 27 の組織図



写真 5-1. cha 110 「三
重経紋織裂」(東京大学
総合研究博物館所蔵品)



写真 5-2. cha 110 の
拡大写真(東京大学総
合研究博物館所蔵品)



図 2. cha 110 の組織図



写真 5-3. cha 110 の
再現織物



写真 6-1. cha 33「階段文様経紋織裂」(東京大学総合研究博物館所蔵品)



写真 6-2. cha 33 の拡大写真 (東京大学総合研究博物館所蔵品)

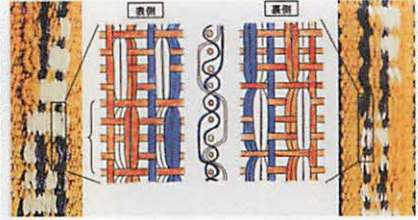


図 3. cha 33 の組織図



写真 7-1. cha 85「階段文様経紋織裂」(東京大学総合研究博物館所蔵品)



写真 7-3. cha 85 の再現織物



写真 6-3. cha 33 の再現織物



写真 7-2. cha 85 の拡大写真 (東京大学総合研究博物館所蔵品)



写真 8-1. cha 144「鳥文様経紋織裂」(東京大学総合研究博物館所蔵品)



写真 8-2. cha 144 の拡大写真 (東京大学総合研究博物館所蔵品)



写真 8-3. cha 144 の再現織物



写真 9-1. cha 147「人面(?)
文様経紋織裂」(東京大学総合
研究博物館所蔵品)



写真 9-2. cha 147 の拡大写真
(東京大学総合研究博物館所蔵
品)

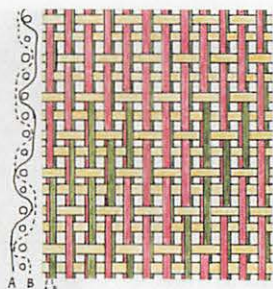


図 4. cha 147 の組織図



写真 9-3.
cha 147 の
再現織物



写真 10-1. cha 143「経縞平織・
緯紋織裂」(東京大学総合研究博物
館所蔵品)



写真 10-2. cha 143 の拡大写真 (東京大学
総合研究博物館所蔵品)



図 5. 交差組織



写真 11-1. IZ16「階段鉤文
様三重緯紋織裂」(東京大
学総合研究博物館所蔵品)



写真 11-2. IZ16 の拡大写真(東
京大学総合研究博物館所蔵品)

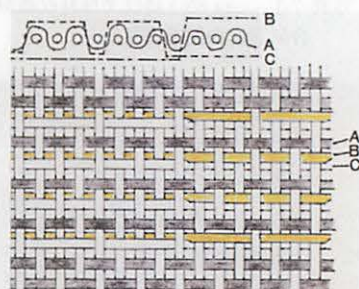


図 6. IZ16 の再現織物



写真 12-1.
cha 78「房付き獸
面文様補緯縫取・
波文様緯紋織裂」
(東京大学総合研
究博物館所蔵品)



写真 12-2. cha 78 の拡大写
真 (東京大学総合研究博物
館所蔵品)



写真 11-3. IZ16 の再現織物

と紋織りの境目に交差組織（図 5）が入っている。平組織部分は S 撚り単糸木綿、縞と紋織部分は S 撚り双糸木綿（白、茶）が使われていた。

cha 89 は、文様も地組織を構成し、文様が表裏交互に現われる昼夜文様で、平織と紋織の間に交差組織が入っている。143 と 89 は同裂の異なる部分と思われる。

cha 113 は、二重緯両面紋織りで、経糸は S 撚り単糸木綿（茶）、緯糸は Z 撚り単糸獣毛（赤、黄）であった。

4-2-2 三重緯紋織

IZ16（写真 11、図 6）は、経地合に織られた布で、文様の四角柄部分は、3 本一組の三重織であった。表側に文様が出ている時、その裏側の緯糸が飛び、文様と平織の 1 本とが交互になっていた。織密度は平織部分、文様部分ともに経糸が 6～7 本/cm と差がないが、緯糸は平織部分では赤、こげ茶、薄茶の部分の糸は赤糸のみの部分より織密度が高く、赤糸のみの部分には太めの糸が使われていた。経糸と緯糸は Z 撚り単糸木綿、文様部分の緯糸は赤が Z 撚り単糸獣毛、黄とこげ茶は S 撚り双糸獣毛であった。

cha109 は、経糸に S 撚り単糸木綿（こげ茶）、緯糸に Z 撚り単糸木綿（こげ茶）、文様部分には、S 撚り双糸獣毛（茶、黄、赤、ピンク、薄茶）が使われていた。

cha124 は、経糸は S 撚り双糸 2 本どり木綿（茶）、緯糸は S 撚り双糸獣毛（茶、赤、ピンク、薄茶）であった。

この二つは、色糸の境目は表面で打ち返しになっていた。

4.3 複合組織

同じ経糸に 2 つ以上の組織が組み込まれたものを複合組織という。cha 78（写真 12）、cha 146 は、平織、緯紋織、縫取の 3 つの組織が一つの裂に織り込まれて

いる。平織から紋織に移る時、経：緯が 1：1 から 2～3：1 と、緯糸 1 目に 2～3 本の経糸が入る。従って平織と紋織の間に交差組織（振り織）を 1 段入れて織幅を整え、組織を安定させる。経糸は交差させたまま織り進むので、綜統をその都度付け替えなければならない。高機ではできないことである。

cha 78 と 146 は基本的には、同じ作りであるが、同一の裂ではなかった。紋織の波文様が少し異なり、糸の太さ、撚りの強弱など、糸使いに違いがあり、両者に表現の工夫が見られた。平織は経糸、緯糸共に木綿（茶）、紋織は経糸が獣毛（赤、黄）、緯糸が木綿（青）、縫取は獣毛（黄）であった。

5. まとめ

チャンカイ文化期を中心とするアンデスの織物 104 点について、調査・分析を行った。104 点の染織品の 87 点がチャンカイ文化期のものであった。

アンデスの織物には、毛足の長い木綿と獣毛が使われ、これらの素材に撚りをかけて、細い上質な糸を作り、それらを駆使して非常に細かい、精密な織物に仕上げている。

織物のモチーフには、鳥、蛇、人物などが多く使われ、これらはアンデス独特の雰囲気を持つ形状に織りあげられていた。

腰帯機を使った織物は、織り上がりの寸法が初めから決まって計画され、布の四方が耳の状態に織り上がっている。文様は表裏の両面が使える昼夜文様が多い。

紋織の大部分と経浮文組織は組織として表裏が同じであるが、綴織は他地域の綴織より緻密に織られ、表裏の区別がつかない程裏側もきれいに仕上げられ、独特の工夫もなされていて、技術の高さが感じられた。

緯紋織、複合組織では平織と紋織の間に腰帯機でなければできない交差組織を入れ、手で出来る手法を駆使して、自由自在に織ることを楽しんでいた様子が伺えた。

チャンカイ文化期は、アンデス染織の歴史の中でも、多くの織物が織られた時期で、経浮文組織と類複様組織は、この文化期特有の織物である。交差組織はチャンカイ以降に見られるようになったと言われている。経複様平組織（経錦）は、アンデスでは現在でも一部の地域で織られている。このように、チャンカイ文化期にはいくつかの新しい技法が生まれ、現在まで引き継がれているものがある。

織物の組織を詳しく調べ、再現織物を制作して確認した本研究から、チャンカイ文化期の特徴が確認されたことは、一つの成果であると考ええる。

謝辞：研究の機会を与えていただきました東京大学総合研究博物館、アンデス織物研究家 故中島章子氏、織物の織組織の分析、再現品の制作のご指導をいただきました幅晴江氏に感謝の意を表します。

本研究の内容は、「古代アンデスの染織文化—ナスカ・チャンカイ文化期の織りと染め—」と題して、平成 24 年 3 月 14 日～4 月 28 日に本学本館 1 階ロビーで展示（共催：東京大学総合研究博物館マクロ先端研究発信グループ）した。

注）織物名称、制作文化期、素材及び資料図版の出典は東京大学総合研究博物館ホームページ

引用文献

- 1) 齊藤昌子、共立女子大学家政学部紀要、第 59 号、pp.17-26 (2013)
- 2) 齊藤昌子、幅 晴江、服飾文化学会誌（論文編）、Vol.10, No.1, pp.107-115 (2009)
- 3) 道明三保子、国別すぐわかる世界の織物の見かた、東京美術、2004 年、p.12
- 4) 鈴木三八子、アンデスの染織技法—織技と組織図、紫紅社、平成 11 年、p.190